

保育者における望ましい絵本の読み聞かせ ～保育内容・言葉テキストの読み聞かせ方法についての比較検討を通して～

吉田 浩一

九州女子短期大学子ども健康学科 福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年6月26日受付、2023年8月3日受理)

要 旨

本研究は、保育内容「言葉」及び「幼児と言葉」に関する学生向けテキストにおいて、絵本の読み聞かせ方法がどのようにとらえられており、どのように説明されているかを比較し、望ましい読み聞かせ方法を探究したものである。まず、絵本の読み聞かせについて必要不可欠な活動内容を明らかにした。次に無作為抽出した10冊のテキストにおいて、絵本の読み聞かせの方法はどのように説明されているのかを比較した。そして、絵本の読み聞かせ活動の解説について、内容分析し、一覧表にした。この比較により、読み聞かせ方法についての記載の有無があることが分かった。テキストによっては、読み聞かせのねらいにそぐわない記述や詳細に述べられてはいるが、実践者が判断すればよい内容などの不必要な記述も見られた。それぞれのテキストにおいて説明されていることを総合的に検討して望ましい読み聞かせのあり方を明らかにした。

キーワード： 保育内容・言葉 テキスト 絵本 読み聞かせ

1. 研究の目的と背景

絵本の読み聞かせは、児童文化財の一つである。読み聞かせについては、実践研究のみならず、その意義に関する研究やその後の人生に対しての影響など、これまで多くの研究報告がなされている。青戸・田邊・原田(2018)らの保育現場における保育者がとらえている読み聞かせの意義についての意識調査によれば「絵本のもつ世界を十分に味わい、その物語に感動したり、驚いたり、時には悲しい気持ちを経験したりする。そうした中で絵の美しさ、力強さ、繊細さを感じ、いくつもの文から表現の面白さを知り、身体一杯に絵本を感じる」意義のほかに『知識・教養』『ふれあい』『文字への興味』『感情の共有』『想像力』といった5つの意義が明らかになったと報告している。¹また、浜崎・黒田(2017)によれば、絵本の読み聞かせがその後の人生に与える影響として、100人の意識調査から、次のことを明らかにしている。²

- A 絵本が好きになり、その後活字に親しみができて、本を読むのが好きになる。
- B 安心感、落ち着き、温かさという親子の情緒的絆が深くなる。
- C 自分が大人になった時に子どもに読み聞かせたいという意識が高くなる。
- D 聞く力などが付く。
- E 相手の気持ちなどを考えることができるようになる。
- F なりたい(就きたい)職業に役立つ。
- G 言葉を覚え、読解力や文章表現力など国語力が高まる。
- H 共感し、協同の態度の芽生えを培う。
- I 読み手との心地よいコミュニケーションが思い出として深く記憶に残る。
- J 学力が高まる。
- K 新しい言葉や知識に対する知的好奇心だけでなく、他者の気持ちを想像し共感したり、想像の世界の中で遊ぶ材料としたりするなど幅広く自分以外の物事に対しての好奇心を培っている。

このように、さまざまな効果をもたらす絵本の読み聞かせであるが、その方法や学生の読み聞かせの技能を向上させる実践論文も見られる。³しかし、学生向けの保育内容・言葉テキストにおいて、読み聞かせ方法の説明について比較検討をするような研究は、見当たらない。

本研究では、保育内容・言葉に関する学生向けテキストの方法の比較検討をすることを通して、保育者において望ましい読み聞かせの方法について明らかにすることを目的としている。

2. 方法

(1) 分析の対象

保育者を目指す学生向けに編集された保育内容・言葉に関するテキスト10冊をランダムに選んだ。このテキストにおける「読み聞かせ方法の説明」が比較検討の対象である。

(2) 分析の方法

読み聞かせの一連の活動としては、①事前の準備 ②場の設定 ③導入 ④読み聞かせ ⑤事後の取り組みの5段階が考えられる。この5段階について、どのように説明をしているのか、内容が妥当であるか、基本的な内容としての是非を比較検討する。

3. 結果

10冊のテキストを比較して表1のようにまとめた。このことで、分かったことは、必ずしも「読み聞かせ方法の説明」が記載されているとは限らないということである。どのテキストも絵本についての説明はあるのだが、読み聞かせ方法については、詳しく説明をしているのは4冊のみであった。大学のテキストにおいては、この内容を掲載しなければならないといった取り決めなどが無い。編集者や執筆者の意図や意向によって違いがみられるのは当然である。「読み聞かせ方法の説明」がないテキストJにおいても、表紙には「教職課程コアカリキュラム・モデルカリキュラム準拠」との記載がある。「教職課程コアカリキュラム」には、細かな内容記述はない。そのため、「読み聞かせ方法の説明」などは編集者、筆者の方針で、掲載はなくてもすまされるのである。

表1 テキストにおける絵本の読み聞かせ方法の説明内容の比較

	テキストA	テキストB	テキストC	テキストD	テキストE	テキストF	テキストG	テキストH	テキストI	テキストJ
絵本についての解説	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
指導計画の例				○				○		
選書(絵本を選ぶ)	○	○			○	○			○	
絵本の開き癖を付ける	○	○								
下読みをする	○	○			○	○				
環境を整える	○	○			○					
導入				○						
持ち方	○	○		○					○	
めくり方	○	○		○	○					
読み方	○	○		○	○	○			○	
読み聞かせ後		○	○	○	○	○			○	○
発展的な児童の言語活動						○	○		○	

(出典：筆者による作成)

本研究の目的からして「読み聞かせ方法の説明」がないテキストを比較しても、望ましい読み聞かせ方法の比較検討にはならない。したがって、本研究については、テキストA、B、D、Eの比較を中心に比較検討する。

(1) テキストAにおける絵本の読み聞かせ方法

テキストAは、読み聞かせ方法として「絵本の楽しみ方(集団での読み合い)」という見出しで、B5サイズ版、1ページに満たない内容で簡単に説明されている。内容は略述すると次のとおりである。

①事前の準備

- ア 絵本を選ぶ・・・旬の絵本を選ぶ・表紙から、形、色、文字と絵の配置の意味、作品の長所を発見する。
 イ 開き癖をつける・・・カバーを外し、本のノドを手のひらで押さえる。
 ウ 下読み・・・ページをめくりながら声に出して読む。長所が伝わるように読む。

②場の設定

- エ 環境を整える・・・掲示物のない壁の前や出入り口から遠い場所など、絵本に集中できる場所。絵本の見えやすい位置に子どもが座るスペースの確保。いすの用意。

③導入

説明はない。

④読み聞かせ

- オ 持ち方とめくり方・・・画面を隠さない注意。絵も読ませる。
 カ 読み方・・・腹式呼吸。母音を響かせてゆっくり読む。絵本の読み方に決まりはない。作品の個性と世界観に合った読み方を自分で考える。

持ち方、めくり方については、画面を隠さないことと、絵も読ませるといった最小限度の説明となっている。また、読み聞かせ方法も、必要最小限度で説明されている。その中で「腹式呼吸」を取り上げているのは、テキストAだけである。絵本の読み方に決まりはないのであるから、持ち方やめくり方などの基本的に気を付けること他のことについては自分で考えさせているのである。

⑤事後の取り組み

説明はない。

(2) テキストBにおける絵本の読み聞かせ方法

テキストBは「読み聞かせの留意点」として4ページにまたがって説明しており、次のような節の構成になっている。

①事前の準備

- (1) 読み聞かせの前に
 ア 読み聞かせにあった本を選ぶ
 イ 下読みをしておく

②場の設定

- (2) 読み聞かせの時に
 ア 見やすい環境を設定する
 イ 絵本の持ち方および高さに注意する

「ア 見やすい環境を設定する」においては、次のように説明されている。

- ・騒音に注意し、広過ぎず、明るい場所で、くつろげる雰囲気を作る。
- ・子どもの気がちらないよう、読み手の背景はできるだけ飾り気のない壁にする。窓から明かりが差し込む環境がよい。また、三角コーナーを確保するなど、聞き手と読み手が扇形になるよう配慮する。
- ・無理に一箇所にまとめようとせず、子ども一人ひとりがお気に入りの場所で楽しめるような雰囲気作りをする。ただし、おもちゃなどを手に持っている子がいれば片付けるようにする。

テキストAに比べ、詳細な説明をしているが、絵本の読み聞かせについては適切な場所、状況、条件を満たせば、どこでもできるはずである。場所については、読み聞かせる声が聞こえることが重要なので「騒音がない場所」「読み聞かせの音が通る場所」ということになる。場所については広い場所でも、その中の一部を活用すればよいので、ここまでの説明はしなくてもよい。明るさにおいても、眩しすぎず、明るすぎず、暗すぎずといった適切な場所であればこだわる必要はない。読み手の背景は、刺激が少ない方がよいことは確かである。背景に目をひく掲示物があれば、絵本から視線が外れてしまう。また、おもちゃを持っている子どもがいた場合など、現場での特殊状況の場面における対応までは説明の必要がない。現場の保育士の判断で、指導をするはずである。この一節を見てわかる通り、基本的な説明と実践者に考えさせ、判断させる内容まで、筆者の考えで詳述している。

③導入

説明はない。

④読み聞かせ

ウ 絵本のめくり方に注意する
エ 自然な読み出しを大切に
オ 子どもの反応に応じて読んでいく
カ ゆっくりと読み聞かせることで文章力を育て、文字にも興味を持たせる

「ウ 絵本のめくり方」については「カバーを外し手置き、見開きをよく開いて開きぐせを付けておく」「めくりやすいようにページの隅に指を添えておく」「ストーリーに応じてめくる速さを工夫する」など、めくり方の基本的な内容を述べている。

「エ 自然な読み出しを大切に」については「オーバーリアクションは控える」「自然な話し方」「登場人物の違いがわかる程度にせりふを読み分ける」「はっきりとした発音」「間を大切に」「内容に合わせて間をおいたりつめたりする」という基本的な内容である。

「オ 子どもの反応に応じて読んでいく」では「物語の場合は、子どもの言葉を取り上げたりせず」と述べている。これは、読み聞かせの基本である。したがって、「反応に応じて読む」場合は、科学絵本や生活認識絵本などの特殊な場合である。物語(昔話、民話、童話、創作童話など)を読むことの多い読み聞かせにおいて見出しに入れる必要はないことである。また「カ ゆっくりと読み聞かせることで文章力を育て」とある。読み聞かせでは、文章力を高めることまで求められていない。自分で読む音読で文体感覚が育つという小学校国語科の実践報告はあるが、保育所や幼稚園での読み聞かせで、文章力をめざすことを述べること自体テキストとしての適切性をうたがうばかりである。領域・言葉においても、文章力向上などはねらわれていないことである。

基本的な内容が述べられているところと筆者の独自の考えが述べられているところもあるのがテキストBの特色である。

⑤事後の取り組み

キ 読み終わった後に注意する

読後の「イメージや感動」を大切にするため、事後の「説明や話し合い」は避けるとある。読み聞かせた絵本を自由に読めるように置いておくことも書かれている。年長では話し合いたい場合については、環境設定をしての実施もよいことを述べている。

⑥その他として

(3) 子どもが絵本を楽しむために
①興味薄い子どもには1対1で読み聞かせる
②絵本の絵を読みながら、お話を創造していく
③保育者自身が絵本を好きになり、楽しむ姿を見せていく

読み聞かせにおいて、興味薄い子どもに対して個別に読み聞かせをすること述べている。このように現場において、個別対応の必要も生じることが考えられる。

(3) テキストDにおける絵本の読み聞かせ

テキストDは、読み聞かせ方法を具体的に説明している。しかし、事前の準備や環境などについての説明はない。

①事前の準備

説明はない。

②場の設定

説明はない。

③導入

読み聞かせのポイントとして、表紙の取り扱いを述べている。その中で「表紙は、導入のお話などを交えながらじっくりと見せます」と述べている。導入の具体例はないが、導入のお話をするのは前提としている。

④読み聞かせ

読み聞かせについては「持ち方のポイント」「めくり方のポイント」「読み聞かせのポイント」の3段階に分けて説明している。「持ち方のポイント」としては、次の3点を説明している。

- | | |
|---|-----------------|
| ア | のどの辺りを下からしっかり持つ |
| イ | 垂直やや斜めに傾けて立てる |
| ウ | 動かさない |

「めくり方のポイント」としては、「なるべく絵を隠さないようにスムーズにめくる」と述べ、「新たな気づきや願いを加味して、自分らしいスタイルを確立していけばよい」としている。

「読み聞かせのポイント」としては、次の4点を述べている。

- | | |
|---|---------|
| エ | 表紙の扱い方 |
| オ | 見返しの扱い方 |
| カ | 扉の扱い方 |
| キ | 声の調子 |

他のテキストと比べ、表紙、見返し、扉をじっくり見せることを述べているのは、テキストDの特色である。表紙においては、「内容を予告するような絵」が描かれているので、導入のお話を交えながらゆっくり見せることを述べている。見返しについても「本文の伏線ともいえる、内容を暗示するような図案や色が使われていることが多く、これから始まる読み聞かせを一層楽しく奥深いものにする効果がある」と述べ、じっくり見せることを推奨している。扉について、さっと通り過ぎる人が多いのだが、扉は絵本の本当の入り口であり「暗示的な絵を載せるなど、これから始まるお話への期待感を高揚させるような工夫がなされている」ため、じっくり見せるべきであると述べている。

テキストDは、絵本そのものを読ませることを意図しているのである。

「キ 声の調子」については後ろの方の子どもたちにもよく聞こえるように十分大きな声を出すことについて述べつつも、絵本の読み聞かせについては「子どもの想像世界を邪魔しないように抑制的な読み方をすべき」と付け加えている。ただし、「適度な感情表現は必要」としており、抑制的すぎるのもよくないと述べている。「適切な声の大きさや感情の込め方、説明の加え方」は、経験によるところが多く、繰り返し経験を積み、臨機応変に対応できるようになることを目指すよう促している。

⑤事後の取り組み

「読み聞かせのポイント」の最後に「終わり方」を説明している。ここでの説明は、次のようにまとめられる。

- ア 「おしまい」と終了を宣言する。
- イ 静かに本を閉じて、裏表紙を見せる。
- ウ 余韻をじっくり味わわせる。
- エ 拍手やお礼を強要したり、説教や教訓を垂れたりすることは論外。

(4) テキストEにおける絵本の読み聞かせ

テキストEは、1ページの中に必要な絵本の読み聞かせの留意点が簡潔に述べられている。

①事前の準備

- ア 読み聞かせに合った絵本を選ぶ
イ 下読みをする

絵本についての選書は「年齢」「発達」「興味」「ねらい」に合ったもので、「人数によって、大きさを選択」し、「絵の鮮明なもの」を選ぶと述べている。絵本の大きさについて述べているのはテキストEだけである。人数に応じて、絵本の大きさを考えるというような配慮も重要である。

②場の設定

- ウ 全員が見えて、聞こえる環境設定にする

この環境設定については、「適度な広さ」「(適度な)明るさ」「騒音に注意する」「くつろげる場」で「読み手の背後に通行や飾りなどの気が散らない環境」という説明があり、場の設定としては必要なことが簡潔に述べられている。

③導入

説明はない。

④読み聞かせ

- エ 本のめくり方
オ 子どもの反応に応じて読み聞かせる
カ ゆっくり読み聞かせることで、文章や文字に興味を持たせる

本のめくり方については、子ども全員が見開きの「画面を見られるようにする」こと、「ページがめくれず、物語が中断しないようにする」こと、「ページをめくるスピードを調節する」ことが述べられている。「子どもの反応」については、「絵本の世界に入り込んでいるかを見ながら、読み方を調節する」とある。

「カ ゆっくり読み聞かせることで、文章や文字に興味を持たせる」ということは、テキストB同様に、不適切な内容である。読み聞かせでは、耳でお話の世界を聞くわけで、目は絵を見ているのである。文章を読んだり、文字を見つめたりしていないのである。むしろ子どもが、文章や文字に興味を持つのは、読み聞かせではなく、自分で絵本を読むときである。ゆっくり読み聞かせをしても文章に興味を持つのではなく、お話の世界に興味を持つのである。読み聞かせは、文章や文字に興味を持たせることをねらってはいない。この見出しの説明として「忠実に読むことで、言葉の美しさや正しい言葉遣いを子どもたちに届ける」と述べている。美しい言葉や正しい言葉遣いで書かれた物語を聞くのであるから、そのことが文章への興味や文字への興味を持たせることに直接つながることではない。

⑤事後の取り組み

- キ 読み終わった後も大切に
ク 興味の薄い子どもには一対一の読み聞かせを取り入れる
ケ 保育者自身が絵本を楽しみ、楽しむ姿を見せる

「読み終わった後も大切に」とあるが、何を大切にすることかの記述がない。このことの説明には、「読み終わった余韻を各自が味わえるように、説明などは避ける」とある。このことを述べるならば、見出しには「読み終わった後の余韻を大切に」と述べるべきである。「読み終わった後の余韻を大切にすること」は、読み聞かせ方法の基本的な内容である。

4 考察

(1) テキスト比較の成果

学生向け保育内容・言葉のテキストを比較して、絵本の読み聞かせの方法についての掲載の有無があるように編集者・筆者によって違いがあることが明らかになった。絵本の読み聞かせにおいても、違いがあるが、他の内容についてもかなりの違いがある。絵本の読み聞かせは、経験を繰り返すうちに自分なりの方法をつくり上げていくものである。そのために掲載の有無があるのだろう。確かに、絵本の読み聞かせの仕方などは、授業者で指導できる内容である。しかし、アクティブラーニングが重視される今日において、児童文化

財の扱い方を学生が自学していくようなことまで考えると、基本的な方法を示し、工夫改善することはないかという問いを設定したりし、読み聞かせを体験しながら、より良い方法を探らせるような構成にした方がよいのではないかと考える。

(2) 望ましい絵本の読み聞かせ

学生向けの保育内容・言葉のテキストにおいて絵本の読み聞かせについて説明している内容を比較検討し、保育内容としてのねらいを逸脱したものをのぞき、総和的にとらえると、次のような読み聞かせが望ましいものとして考えられる。

①事前の準備

- ア 絵本を選ぶ・・・子どもの年齢、発達段階、興味・関心、季節などを考慮し、旬の絵本を選ぶ。
- イ 絵本を解釈する・・・表紙から裏表紙にわたり、形、色、文字と絵の配置の意味を解釈する。作品の主題や長所を発見する。
- ウ 開き癖をつける・・・カバーなどを外し、開きやすいようにする。
- エ 下読みをする・・・スムーズに読めるように、めくり方を含め、下読みをする。

②場の設定

- ア 読み聞かせの背面は目をひかない場所・・・子どもが読み聞かせに集中できるように背面には人通りの見える窓や目を引く飾りつけない場所を選ぶ。
- イ 子どもの座るスペース・・・広過ぎず、明るすぎず、くつろげる適度な場所を選ぶ。
- ウ 気になる音がしない場所・・・騒音や耳障りな音のない場所を選ぶ。

③導入

- ア 効果的な導入・・・絵本に興味関心を高める導入をする。

④読み聞かせ

- ア 絵本すべてを見せる・・・表紙、見返し、扉、裏表紙などもじっくりと見せる。
- イ 絵が見えるめくり方・・・腕で絵を隠さないようにする。
- ウ めくり方の工夫・・・話の展開に応じて、効果的なめくり方をする。
- ウ 読み方の工夫・・・登場人物に応じて、適度な感情表現をするなど、読み方を工夫する。
- エ はじめ・おわりの宣言・・・読み聞かせのはじまり、おわりを告げる。

⑤事後の取り組み

- ア 余韻の重視・・・余韻をじっくり味わわせる。
- イ 読み終わりの留意事項・・・拍手やお礼を強要したり、説教や教訓をしたりしない。

結語

幼稚園教育要領や保育所保育指針においても、具体像としての読み聞かせは記述されていない。むしろ、読み聞かせは、保育者によって創造され、経験とともによりよいものと向上していく。そのため、学生用テキストにおいては、筆者の読み聞かせ観によって書かれたもので、画一的に定められていない。今回、テキストを比較検討したことで、むしろ、各筆者による読み聞かせのあり方を総和的にとらえた方が、よりよい方向性を示すものととらえることができた。

今後は、他の児童文化財においても、学生用テキストの比較検討をし、活用法の探究することが課題である。

注

1. 青戸泰子・田邊資章・原田夏帆「保育・教育現場における読み聞かせの意義」『人間教育学会紀要 第30号』pp.39-46 2018年
2. 浜崎隆司・黒田みゆき「絵本の読み聞かせがその後の人生に及ぼす影響－テキストマイニング法を用いて－」『鳴門教育大学研究紀要 第32巻』pp.86-92 2017年
3. 加藤房江「保育養成校における保育内容〈言葉〉指導法の実践－より実践的な授業を目指して－」『埼玉純真短期大学研究論文集 第8号』pp.51-65 2015年

<引用及び参考文献>

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』 2017年
- 2) 厚生労働省『保育所保育指針』 2017年
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園保育・教育要領』 2017年
- 4) 秋田喜代美・三宅茂夫監 秋田喜代美・砂上史子編『子どもの姿からはじめる領域・言葉』 みらい 2020年
- 5) 秋田喜代美・野口隆子編著『保育内容・言葉』 光生館 2018年
- 6) 榎沢良彦・入江礼子編著『シードブック 保育内容 言葉〔第3版〕』 建帛社 2018年
- 7) 大越和孝・安見克夫・高梨珪子・野上秀子・齋藤二三子編著『改訂新版 保育内容「言葉」言葉とふれあい、言葉で育つ』 東洋館出版社 2018年
- 8) 大久保愛・長沢邦子編著『保育言葉の実際〔第2版〕』 建帛社 1999年
- 9) 太田光洋編著『保育内容・言葉第三版』 同文書院 2018年
- 10) 太田光洋・古相正美・野中千都編著『保育ニュースタンド 保育内容「言葉」－話し、考え、つながる言葉の力を育てる－』 同文書院 2021年
- 11) 大橋喜美子・川北典子編著『保育内容 指導法「言葉」－乳幼児と育む豊かなことばの世界＝』 建帛社2019年
- 12) 塩美佐枝・古川寿子編著『保育内容「言葉」 乳幼児期の言葉の発達と援助』 ミネルヴァ書房 2020年
- 13) 戸田雅美 編著『演習 保育内容「言葉」』 建帛社 2019年
- 14) 内藤知美・新井美保子編著『コンパス 保育内容 言葉 第2版』 建帛社 2018年
- 15) 成田朋子編著『新・保育実践を支える言葉』 福村出版 2018年
- 16) 馬見塚昭久・小倉直子編著『保育内容「言葉」指導法』 ミネルヴァ書房 2018年
- 17) 馬見塚昭久・小倉直子編著『保育学生のための「幼児と言葉」「言葉指導法」』 ミネルヴァ書房 2022年
- 18) 無藤隆監門修・宮里暁美編集『新訂・事例で学ぶ保育内容 領域 言葉』 萌文書院 2021年

Desirable picture book reading for childcare workers
～ Through a comparative examination of childcare contents and
reading methods of word texts ～

Koichi YOSHIDA

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Woman's Junior College
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

This study compares how picture book reading methods are perceived and explained in textbooks for students on childcare content “words” and “infants and words”, and examines the desirable reading methods. This is what I explored. First, we clarified the activities that are essential for reading picture books. Next, we compared how the methods of reading picture books were explained in 10 randomly selected texts. About the commentary of the reading activity of the picture book, the contents were analyzed and it was made into the list. By this comparison, it was found that there was or was not written about the method of reading aloud. In the text, there were unnecessary descriptions, such as descriptions that did not meet the purpose of reading aloud, and details that were described, but the content should be judged by the practitioner. I comprehensively examined what was explained in each text and clarified the ideal way of reading.